

火の戦車と共に

〔聖書〕 列王記下2章8～15節

エリヤが外套を脱いで丸め、それで水を打つと、水が左右に分かれたので、彼ら二人は乾いた土の上を渡って行った。 渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。」エリシャは、「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と言った。 エリヤは言った。「あなたはむずかしい願いをする。わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。 エリシャはこれを見て、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と叫んだが、もうエリヤは見えなかった。エリシャは自分の衣をつかんで二つに引き裂いた。 エリヤの着ていた外套が落ちて来たので、彼はそれを拾い、ヨルダンの岸辺に引き返して立ち、落ちて来たエリヤの外套を取って、それで水を打ち、「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言った。エリシャが水を打つと、水は左右に分かれ、彼は渡ることができた。エリコの預言者の仲間たちは目の前で彼を見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」と言い、彼を迎えに行き、その前で地にひれ伏した。

〔序〕 臨終に聞く言葉

今日は旧約聖書を代表する預言者エリヤの生涯の閉じ方を学びます。「人の死に様には、その人の生き方が端的にあらわれる」と聖書教育に書かれていました。結婚生活7年目の女性が、癌との闘病生活の末に臨終を迎えました。奥さんの傍で院長が夫に尋ねました。「この女(ひと)を愛していますか?」「はい、愛しています。いや、尊敬しています」。迷惑を沢山かけた闘病生活だったはずですが。ところが病気と戦う妻の姿に尊敬をさえ覚えたと言っています。この奥さんはどんなに嬉しく夫の言葉を聞いて、旅立ったことでしょうか。お二人の信仰が伺い知れます。

今日の列王記2章の書き出しは「主が嵐を起こしてエリヤを天に上げられたときのことであり、あります。エリヤは、独りになって死にたいと思ったのです。しかし弟子のエリシャがどこまでも付いて来て離れません。ギルガルからベテル、エリコを通り抜け、とうとうヨルダン川を渡って荒野に入りました。すると突然火の戦車が火の馬に引かれて現れ、嵐(つむじ風)の中を天に上って行ってしまいました。

エリシャは思わず叫びました。「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、騎兵よ」。一瞬のうちの出来事です。エリシャは自分の衣を引き裂いて悲しみました。エリヤが着ていた外套が天から落ちて来ました。エリシャはそれを拾い、ヨルダン川の岸辺に戻りました。そしてエリヤの外套で川の水を打つと、水が左右に分かれ、彼は渡ることが出来ました。

それを見ていたエリコの預言者集団は、エリヤの霊がエリシャに受け継がれたことを悟り、彼の前に

ひれ伏しました。しかし彼らはエリヤが天に引き上げられて行ったことが信じられません。50人で近辺の山や谷を3日間探し回っています。けれども遺体を見つけることが出来ませんでした。こうしてエリヤは、モーセと同じくお墓がないのです。

まことにエリヤの生涯は、神さまのために嵐の中を火の戦車をもって突っ走るようなものだったのです。その生涯を簡単に振り返ってみましょう。

[1] 火のように激しい生涯

彼はアハブ王の前に突然現れて、神の裁きとして大飢饉がもたらされると宣告しました。その通り日照りが続き飢饉が始まりました。王は彼を憎み、逮捕しようとやっきになりました。彼はケリト川のほとりに身を隠し、川が涸れると遠く外国のザレプタに逃れて、貧しい寡婦の家で暮らします。三年目に再び王の前に現れました。「お前か、イスラエルを煩わせる者よ」。「わたしではなく、主の戒めを捨て、バアルに従っているあなたとあなたの父の家こそ、イスラエルを煩わせている」(上 18:17～18)。

エリヤはアハブ王に向って、カルメル山にバアルとアシュラの預言者 850 人を集め、自分と対決させるよう挑戦状を突きつけます。そして集まって来た全ての民にエリヤは呼びかけました。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え」。「それぞれ 1 頭の雄牛を裂いて薪の上に載せ、火をつけずにおのおの自分の神の名を呼び、祈ろう。火をもって答える神こそ神であるはずだ」。

初めにバアルの預言者たちが自分たちの薪の前でバアルの名を呼び続けました。半日叫び、踊り回りましたが薪は燃え上がりませんでした。次にエリヤが一人で自分の薪の前で祈りました。「主よ、答えてください」。すると火が降って、犠牲の牛と薪が焼き尽くされました。これを目の当たりにしたすべての民は「主こそ神です、主こそ神です」とひれ伏したのです。エリヤは直ちにバアルの預言者たちを捕えよと民に命じ、キシオン川で皆殺しにしました。さらに祈りをもって雲を呼び寄せ、激しい雨を降らしました。こうしてエリヤは劇的な大勝利をもたらしたのです。

これに対して王妃イゼベルが激しく怒りました。彼女は地中海貿易で豊かな富を持つシドン王の娘で、アハブ王はその商業の利益を導入しようとしてイゼベルを妻に迎えたのです。イゼベルは商売のご利益をもたらすバアル信仰を積極的にイスラエルに広めようとして、預言者 850 人をシドンから呼び寄せました。彼女は自分の大切な預言者たちを皆殺しにしたエリヤに死刑宣告を下しました。

ところがアハブ王もカルメル山で「主こそ神です」とひれ伏した民衆たちも、エリヤの側に立って彼を守ろうとしないのです。エリヤは失望してしまいました。一人で 850 人と対決したあの壮烈な戦いは一体何だったのか。心身の疲れがどっと噴出し、虚脱状態(燃え尽き症候群)になってしまいました。ですからイゼベルの恫喝に、もう一度毅然として対抗する気力を失い、恐怖に駆られてしまっ

たのでしょう。

彼は隣国のユダ王国に逃げ込みます。しかも遠く南部砂漠地帯にあるベエル・シェバまで逃げました。そして従者を残すと、更に一日荒野をさまよひ、えにしだの木の下に座り込みました。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください」。そう言うと、崩れるように横になり、眠り込んでしまいました。天使が水とパンを枕元に置いてくれました。目を覚ましてそれを食べると、また眠り込みました。精魂尽き果てていたのです。

こうして天使に養われて休んだエリヤは元気を取り戻し、40日歩いてモーセが十戒を頂いた神の山ホレブに行きました。すると神さまは、静かな細い声をもって、アラムの王となるハザエルとイスラエルの王となるイエフに油を注ぎ、エリシャを弟子にするという新しい任務をエリヤに与えます。「行け、来た道を引き返せ」この場面は先週宮井兄が語って下さいました。

やがてアハブ王はアラムとの戦いで死に、息子アハズヤが王になります。彼は宮殿の屋上の部屋から落ちて病気になりました。彼はペリシテの大きな町エクロンのバアルの神に祈願の使者を派遣しました。エリヤはそれを知って、「イスラエルには神がないとでも言うのか。あなたは必ず死ぬ」と宣告しました。王はエリヤを逮捕するために50人の兵士を送りましたが、彼は山の頂に座って軍隊を迎えます。すると天から火が降って、兵士たちは焼き殺されてしまいました。二度目の50人も同じように天からの火で焼き殺されます。三度目に派遣された50人の隊長はエリヤに命乞いをしました。エリヤは50人の兵隊と共に王宮へ行き、直接神の裁きを宣告し、その言葉通りにアハズヤ王は死んでしまいました。(列王記1章)

このように、エリヤは唯一人で国王と対決し、天から下る火をもってイスラエルの主なる神の御心を現し、神の裁きを下して預言者としての任務を果たしたのでした。嵐の中を火の戦車をもって突っ走るような生涯でした。「見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った」この死に様は、まさに彼の生き方を端的にあらわしていたと言えましょう

[2] エリシャはエリシャとして

エリヤに死期が迫ってきました。彼は独りになって死にたいと思ったようです。しかし弟子のエリシャがどこまでも付いて来て離れません。ギルガルからベテル、エリコを通り抜け、とうとうヨルダン川を渡り荒野に入りました。エリシャは今日死ぬ人を50キロも歩かせてしまったのです。エリヤはかくしゃくとしていたのです。まさに勇士ですね。

「別れにあたってあなたのために何をしようか」とエリヤはエリシャにたずねました。「あなたの霊の二つ分を受継がせてください」。「それは難しい願いだ。わたしが取り去られるのを見届けられれば、かなえられるだろう」。エリヤのような働きをするには、エリヤが授かった霊の二倍は頂かなければと、エリシャは思ったのでしょう。しかし神の霊は神さまから頂くものです。エリヤが与えるものではありません。しかも神さまから頂くとしても、本人にそれ相応の霊的感性が必要です。「エリシャよ、私が天

に召されていく霊的出来事をどれだけ見届けられるか、そこで貴方の霊的感性が測られるだろう」とエリヤは言ったのでした。

エリシャは突然起こったつむじ風の中を、火の馬が引く火の戦車と共に天に上っていくエリヤを見上げることが出来ました。エリヤが着ていた預言者を表す外套が天から落ちて来ました。エリシャはそれを拾い、ヨルダン川の岸边に着くと、エリヤがやったように、外套で水を打ってみました。するとエリヤと一緒に渡った時と同じように、水が左右に分かれ、川を渡ることが出来ました。エリシャはエリヤと同じように神の霊を頂いたのです。

エリコの預言者集団は『「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている』』と言い、彼を迎えに行き、その前で地にひれ伏した。」と聖書には記されていますが、これはエリコの預言者集団の誤解です。違います。エリシャはエリヤの霊を受けたものではありません。神さまからエリシャへの霊が与えられたのです。

エリヤがアハブ王とバアル、アシェラの預言者 850 人と対決した時、神さまは火を降して犠牲の雄牛と薪を燃え尽して応えました。アハブ王の息子アハズヤがエリヤを逮捕しようと 50 人の兵隊と隊長を遣わしました。エリヤは山の頂に独り座り、天から火が下って、兵隊たちは焼き尽くされています。二度目の 50 人も天からの火で焼き殺されました。

エリヤを通して現れる神さまは、火をもってご自身を現し、火をもって裁きを下す激しいお方でした。ということはエリヤ自身が、火のような激しい信仰の持ち主だったと言えるでしょう。ですからエリヤの臨終に立ち会ったエリシャは、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、嵐(つむじ風)の中を天に上げられていくエリヤを見たのでした。

ところが列王記下 13 章まで記されていく預言者エリシャの活動には、火を降してご自身を現す神さまの働きは全く見られないのです。エリシャの病が重くなった時、見舞いに来たヨアシユ王は、泣いて言いました。「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」(13:14)。これは天に上って行くエリヤへのエリシャの叫びと同じ言葉です。でもエリシャの場合は、火の戦車・火の馬は現れていません。穏やかに病床で息を引き取ったようです。エリヤはエリヤ、エリシャはエリシャとして、神さまはご自分の豊かな霊の働きの幾分かずつを分け与えて、お用いになったのです。

[結] 土の器に神の霊を頂いて

エリヤはやはりモーセと共に旧約聖書を代表する偉大な預言者でした。このエリヤにしっかり従って離れなかったエリシャは、貴重な経験や教訓を沢山学んだことでしょう。しかしエリシャはエリヤと違います。偉大なエリヤと比べると劣った所が多くあったことでしょう。しかし神さまは、エリシャにも神の霊を豊かにお与えになり、お用い下さいました。このことは私たちにとって大きな喜びです。私は私で優れていなくても良いのです。神さまの霊が私という土の器を用いて、神さまの恵みの業をなさってくださいますのでした。

大事なものは霊的感性を私なりに豊かにしていくことです。エリヤは「わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば」とエリシャに言いました。エリヤと 死別する悲しい出来事の中に神さまの恵みの業を見出していく霊的感性です。奥さんの闘病生活に寄り添いながら、偉いなあと尊敬の念を深め、「はい、愛しています。いや、尊敬しています」と言えた霊的感性です。病気になった辛い日々の中で、これまでの生き方を変え、新しい歩みを踏み出していく恵みを得ていく感性です。

その感性に応じて、神さまは私たちに神の霊を与えて、お用いくださるのです。神さまが今日私たち一人一人と共にいて、恵みを下さろうとしています。あっ、ここに神さまが働いて下さっていると気付いて感謝いたしましょう。神さまは、あのイエス・キリストというお姿をとって私たちと共に生きて下さいました。生活の中にイエスさまの 気配を感じとることが出来ます。その霊的感性を豊かにして参りましょう。

神さまは私には私なりに、神さまの霊を豊かに与えて、神さまの御用にお用い下さいます。神さまの恵みを周りの方々にお分けして、生きて参りましょう。

完